

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：32642

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23710306

研究課題名(和文) エリトリアにおける国民国家形成の史的展開：連邦制(1952-61)の経験

研究課題名(英文) Historical study on Nation-Building in Eritrea: the experience of Federation

研究代表者

眞城 百華 (Maki, Momoka)

津田塾大学・付置研究所・研究員

研究者番号：30459309

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：エリトリア・エチオピア連邦制の下で10年間の短命に終わったエリトリア自治政府は、エリトリア併合をにらむエチオピアと北東アフリカの地域再編を狙う国際政治の影響下にあった。エリトリア自治政府の運営が設立直後から硬直化する過程をエリトリア内政史料、英米の外交史料から明らかにした。1952年、56年、60年と3回実施された議会選挙も、52年の選挙以外はエチオピア政府による野党指導者達への選挙妨害も顕著であった。先行研究でも指摘されたエチオピアによる50年代前半からエリトリアの議会、警察、与党の支配について本研究では新たに利用したエリトリア内政史料に基づきエチオピア介入の実態を詳細に検討することができた

研究成果の概要(英文)：The Eritrean Government under Ethiopia-Eritrea Federation during 1952-62 was deeply influenced by the Ethiopian Empire's intervention and International politics, especially on election, assembly and security. British records and Eritrean Federal Government's records reveal the discussion of Eritrean Assembly and the social changes at Provincial administration in 1950s. Under the struggle for Eritrea by Ethiopia, Britain and United States in 1940s and 1950s, Tigray was political key and Eritrean Tigriana migrants were involves in political struggle and propaganda. Ethiopian government had collaborated with Eritrean Tigriana in Ethiopia. Ethiopian Government organized the Ethio-Eritrea Unity Association and appointed Eritrean as President of Association unofficially. British, Ethiopia, Eritrea and United States' historical records were base to study the activities and influences of Association. For further reesarch, it is important to focus on the agancy of those Eritreans in Ethiopia,

研究分野：アフリカ史、アフリカ研究、エチオピア・エリトリア

科研費の分科・細目：若手研究B

キーワード：アフリカ史 エリトリア エチオピア 国際関係 アフリカ政治 国連 脱植民地化

1. 研究開始当初の背景

エリトリアは、30年以上にわたる独立闘争を経て1993年にアフリカで一番新しい独立国となった。エリトリアの独立闘争と共闘関係を結びメンギスツ政権を倒した当時のエチオピア暫定政府もエリトリアの独立を承認した。独立闘争を戦ったエリトリア人民解放戦線(Eritrea People's Liberation Front, EPLF)は独立後、名前を民主正義人民戦線(People's Front of Democracy and Justice, PFDJ)と変更した。エリトリア新政権に対して独立当初は多くの関心が集まったが、PFDJが牽引する国家運営では独立闘争期の政治的・思想的影響がいまだに非常に強く、また一党制のもとで強権的な政治運営には内外から批判が高まる。エリトリアの歴史は、他のアフリカ諸国と脱植民地化やその後の経緯が大きく異なり、隣国エチオピアの影響も強く受けてきた。エリトリアのエチオピアとの関係は、イタリアの植民地統治(1890-1941)、英軍政(1941-51)、エチオピアとの連邦制(1952-62)、エチオピアへの強制併合(1962)、エチオピアからの独立闘争(1961-91)、エリトリア独立(1993)、国境紛争(1998)と常に北東アフリカの火種となってきた。

従来のエリトリア研究では、60年代以後の独立闘争、エチオピア政府との対立構造に主眼がおかれた。1993年に独立を達成した後も1998年にエチオピアと国境紛争が生じたため、現在もエチオピアとの対立関係に関心が集まる。他方で、PFDJの前身であるEPLFが独立闘争期にエリトリアの諸反政府勢力の中から台頭してくる過程で、エリトリアにおける民族や宗教、地域の多様性については多くが不問に付されてきた。現在のPFDJ体制の下では全国規模の国政選挙が実施されておらず、諸層の声が政治に反映されにくい情勢にある。エリトリアの国民国家形成を考察するためには、イタリアの植民地時代にまでさかのぼって分析する必要があるが、現体制と比較検討するために最も重要になるのがエチオピアとの連邦制のもとで「エリトリア政府」として自治を実施した1952-61年のエリトリア自治政府による国家運営の経験である。エチオピア政府によるエリトリア併合をにらんだ政治工作もエリトリアの政治運動に多大な影響を及ぼした。他方で外交や軍事をエチオピア中央政府に委ねつつも、連邦制の下でエリトリアの自治政府の運営は、列強やエチオピアの多大な干渉を受けてきたエリトリア史においてエリトリア人による初の国家運営として再検討する意味は大きい。

応募者は、これまでエチオピア・ティグライ州を主な研究対象とし、エチオピア帝政期のティグライ民族と国家の関係について研究を行ってきた。2008-2009年度科研若手研究(スタートアップ):研究課題「エ

チオピアにおける民族と国家関係再考:統合と分断の狭間」で、エチオピアとエリトリア両国にまたがって居住し、両国の狭間におかれたティグライ人の視点から両国間の政治変動、経済関係、人の移動などの社会関係について分析を行った。ティグライ人はエリトリアにも居住しており、エチオピアのティグライ人の研究にとってもエリトリアの政治変動の影響は大きい。エリトリアにおいてもエチオピアと歴史的に関係の深いティグライ人と他の民族と関係がエチオピアとの併合や分離をめぐる重要な争点となる。エチオピアの民族政策にかかわる研究蓄積は、本申請におけるエリトリア研究にも資する。

2. 研究の目的

本研究は、エリトリアにおける国民国家形成の展開について、エチオピアとの連邦制(1952-61)期のエリトリア自治政府の政治制度や諸政策の検討を通じて分析することを目的としている。30年間の独立闘争を経て1993年にアフリカで一番新しい独立国として成立したエリトリアの国民国家形成の諸課題を分析するためにも、1950年代にエリトリア人がエチオピアとの連邦制の下で「エリトリア政府」として「自治」を行った過程を分析する意義は大きい。エリトリアにおけるイタリアによる植民地支配、イギリス軍政、国連による議決や調査を踏まえて連邦制下のエリトリアにおける国民国家建設の政治的展開と課題、エチオピアとの関係を分析する。

3. 研究の方法

本研究を実施するにあたり、エチオピア、エリトリアにおける史料収集とその分析が研究の核となる。特にエチオピアの内務省史料は、本研究にとって不可欠な分析対象であり、来年から始まる公開と同時に本研究を開始する必要がある。エリトリアについても、本研究の主眼となる連邦時代の政府史料の分析により連邦時代の政治変動の全容が明らかとなる。1年目にエリトリア、イギリス、2年目にエチオピアとエリトリアでそれぞれ史料の渉猟と分析を行い、3年目は両国で最終的な史料調査を行うとともに本研究のとりまとめを行う。

両国の内政史料分析に加え、イギリス、イタリア、国連の関連史料の分析も行う。文献も研究目的であげた研究に加え、両国で行われている研究蓄積を改めて渉猟・分析し、研究の深化に役立てる。

本研究期間内に、以下の区分でエリトリアの国民国家形成の史的展開を検討する。

A) 自治政府成立に至る議論の展開

- 1) 英軍政期(1941-51)のエリトリア諸政党の自治政府建設をめぐる議論
- 2) 国連のエリトリア調査報告からみるエ

リトリア住民の国家像

B) 連邦制下のエリトリア自治政府における議論の展開

3) 併合派と分離派によるエリトリア政府運営方針の検討

4) 自治政府の民族・宗教・言語政策

5) 自治政府下の州行政の展開

6) エチオピア政府の介入と自治政府の対応

A) では1) 2) の区分で連邦制形成以前のエリトリアにおけるエリトリア自治政府の運営方針に関する政党ならびに住民の議論を分析する。

B) が本研究の主な関心時期にあたり B-3 で A-1 で検討した諸政党の自治政府案の変容を分析する。B-4 では、自治政府の憲法、ならびに議会史料から自治政府の運営における民族、宗教、言語に関する政策の展開とそれにかかわる議論を整理する。B-5 では、イギリス軍政下から5つの行政区に分けられた州行政の運営と展開について分析を行う。自治政府における分離派と併合派の議論に耳目が集まるが、他方で民族的、宗教的な多様性の問題が表出する場となった州行政における議論を議会文書などから分析する。B-6 では、エチオピア政府からの介入とそれに対する自治政府の対応を取り上げる。従来の研究でも取り上げられたエチオピア政府によるエリトリア諸政党に対する政治介入や接触についても分析を行う。また1955年のエチオピア憲法改正によりエリトリア内でもアムハラ語が強制され、エリトリア住民の母語であるティグライ語やアラビア語が教育言語から除外されるなど自治政府運営にかかわる部分でエチオピア政府の影響がエリトリア内で及ぼした影響を再考する。

最終的に上記の分析を踏まえて、連邦制下のエリトリア自治政府の国家観、ならびに国家運営の総括を行い、現在のエリトリア政府のあり方と比較検討を行う。

4. 研究成果

①連邦制成立に至る過程、特に1940年代の英軍政下におけるエリトリア諸政党、民族の主張を分析するために、連合4か国調査団の報告書の分析を行い論文としてまとめた。1947年に実施された連合4か国調査団による聞き取り調査ではエリトリアの各政党がエチオピアとの併合か分離、エリトリア分割、正教徒とムスリムの処遇、少数民族の処遇をめぐって対立を深めている構図が明らかとなった。他方、調査を実施した米ソ英仏も北東アフリカの再編をにらんで各国の利害を反映した調査の評価を行っており、1950年の国連決議を前にエリトリア内政、エリトリアを取り巻く国際関係、エチオピア政府の介入が複雑に交差する第一段階の分析を実施することができた。

②エリトリア自治政府の運営に関する分析において先行研究で十分に検証されていなかった、エリトリア議会選挙についてエリトリア自治政府の内政、警察の史料を基に分析した。1952年の英軍政による最初の議会選挙後、1956年、1960年に議会選挙が実施されているが、56年選挙前からエチオピア政府による議会介入、エリトリア内政介入が始まっていたため先行研究では56年、60年の選挙に十分な分析が行われてこなかった。本研究では、エリトリア政府保管の史料利用によってエチオピア政府の介入の下実施された2階の選挙の過程を分析することが可能となった。また、選挙や野党の政治活動に対する警察の妨害も明らかになった。

③エリトリア自治政府の運営について、②と同じくエチオピア政府の介入を理由に自治政府の運営について研究蓄積がほぼない。エリトリア議会史料、地方政治に関する報告書から、エチオピアの介入、エリトリアにおける統一党の支配の下においてエリトリアは同時期のエチオピアでは実施が不可能であった「自治」を行っていた実態が明らかとなった。首都におけるエリトリア政府の政治混乱にもかかわらずエリトリアの各州から定期的に報告書があがっている。政局に関しては治安報告がおもであるが、土地問題、民族間対立などエリトリア社会の分析に不可欠な文書を発掘することができた。州により報告書のばらつきがあり、かつ報告書も定期的に出ていない。史料批判もおこないながら現在これらの史料を基に特にエリトリア高地、スーダンへの分割が問題となった西部州に関する分析を進めている。

④1941年のイタリア撤退後、国内外の政治に翻弄されてきたエリトリアであるが、エリトリアにいかなる政体を構築し、誰をエリトリア人と規定するのかという議論は、政党内、政党間、民族間で限定的ながらも実施されてきた。エリトリアの将来の見通しが立たない中でエリトリアの分割やエチオピア併合など大きな争点に振り回されているが、特に1950年12月の国連総会決議でエチオピア・エリトリア連邦制ならびにエリトリア自治政府の成立が決定した後に諸議論が国連主導で展開された。連邦制が決定していたため、エチオピア政府の議論への関与もすでに始まっていたが、国連ミッションとエリトリア諸政党の代表による憲法草案や連邦制の構成、エリトリア自治政府の構成に関する議論の中で一連の議論がいったんまとまった形で表れている。この点についても現在分析を進めている。最終的なまとめにはイギリス、アメリカ、エリトリアが所蔵する史料以外に、国連における一連の議論をフォローした史料の利用が不可欠であり、今後も研究を深めたい。

⑤エチオピアとエリトリアの両国にまたがって居住するティグライ人の動向もエリトリアの脱植民地化と両国対立の深化をみるために必要な視点である。エチオピア政府がエリトリア自治政府への介入のために採用した複数のエリトリア出身ティグライ人の氏名と経歴をイギリス史料より発掘し、さらに彼らの動向を他の史料から検討した。エリトリア自治政府の行政長官となったアスファ・ウォルドミカエル以外に、エチオピア政府官僚となったもの、ティグライ州アドワの準州知事としてエリトリアとの国境付近に常駐しエチオピア・ティグライ州における世論の醸成とエリトリア内の反乱分子への支援を実施したイサイアス大佐などエチオピア政府に加担した人物の役割、活動の詳細をエチオピア内務省史料から発掘することができた。この点についてアメリカ・アフリカ学会で報告した。報告に基づき現在一連のティグライ人の活動についてまとめている。

⑥一般のティグライ人の動向もエリトリアの脱植民地化と両国対立を社会的文脈から理解するために不可欠な分析視点である。エチオピア政府官僚のテコ入力で 1944 年にエチオピアで創設されたエチオピア・エリトリア統一協会の活動を中心に、在エチオピア・エリトリア人コミュニティにおけるエリトリア併合論の推進過程、エチオピアにおける世論の醸成を分析している。イタリア侵略前からエチオピア政府が教育を授け、雇用したエリトリア出身ティグライ人、ガブレマスカル・ハブレマリアムを代表とする同組織は、表向きは「民間」団体であるが、創設にエチオピア政府が関与していることは英米の外交史料からも明らかである。第二次世界大戦終結直後の 1945 年 9 月末の連合 4 か国外相会談に合わせて、統一協会はアディス・アベバでエリトリア人を動員してポピュラー・プロテストを行い、米ソ英仏各国の大使館に行進して、エリトリアのエチオピア統合を「民意」として訴えるなどの活動を行ったことが明らかとなった。エチオピアのエリトリア併合政策がエリトリアのみならず、エチオピア国内、果ては外交団へのアピールを通して展開された事実は興味深い。同内容についてはアメリカ・アフリカ学会ならびに日本アフリカ学会において成果を発表し、現在論文としてまとめている。

⑦エリトリアの自治政府の運営、エチオピアの介入、国際政治の関与を軸に現在も関係が悪化するエチオピア・エリトリアの関係を考察する必要がある。1890 年のイタリアによるエリトリア植民地支配から現在の両国関係の対立まで包括的に再考するために、「民族の分断と地域再編—ティグライから見たエチオピアとエリトリアの 100 年」の論文を執筆した。

⑧本研究で実施したエチオピア・エリトリア関係の複雑な構図、対立深化の背景を基盤として現在の両国関係の悪化を分析した論文をアジ研レポートにまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ①眞城百華、「女性兵士が歩んだ道：エチオピア内戦と戦後 20 年」、フィールド+、no.6、pp.6-7、2011 年、査読なし
- ②眞城百華、「エリトリアを取り巻く国際関係—新興独立国 20 年の歩み—」、アジ研ワールド・トレンド、no.205、pp.33-34、2012.
- ③眞城百華、「エリトリアにおける脱植民地化と政党対立の萌芽—連合 4 か国調査団報告の検討—」、総合研究、第 6 号、pp.62-79、2013、査読なし
- ④眞城百華、「2012 年の歴史学界—回顧と展望—アフリカ」、史学雑誌、第 122 編、5 号、pp.299-302、2013. 査読なし
- ⑤眞城百華、「近代史部会コメント 2」、歴史学研究、no.911、pp.119-121、2013 査読なし

[学会発表] (計 6 件)

- ①眞城百華、「エチオピアにおける文化遺産返還と『植民地責任』」、第 21 回ナイル・エチオピア学会、京都、2012 年 4 月 22 日
- ②眞城百華、「エリトリアにおける連邦制の経験に関する一考察」、第 49 回日本アフリカ学会、大阪、2012 年 5 月 27 日
- ③眞城百華、「境界、民族と国際関係 エチオピア・エリトリアにおける ティグライの経験」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・公開シンポジウム「境界/Borders in Africa —メディア・民族・宗教の視点から」、東京、2012 年 12 月 16 日。
- ④眞城百華、「エリトリアにおける脱植民地化とエチオピア帝国再建—越境者から見る両国関係—」、第 22 回日本ナイル・エチオピア学会学術大会、京都、2013 年 4 月 21 日
- ⑤Momoka Maki, “The role of Tigray migrant in decolonization of Eritrea and reconstruction of Ethiopia Empire”, 56th Annual Meeting of the African Studies Association, Baltimore, USA, 23 November, 2013
- ⑥眞城百華、「越境者から見るエチオピア・エリトリア関係」、第 51 回日本アフリカ学会、京都、2014 年 5 月 25 日

[図書] (計 1 件)

眞城百華、「民族の分断と地域再編—ティグライから見たエチオピアとエリトリアの 100 年」、小倉充夫編著『現代アフリカ社会と国際関係—国際社会学の地平

一』、有信堂,pp. 13-48, 2012 年

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

眞城百華 (MAKI, Momoka)
津田塾大学・国際関係研究所・研究員
研究者番号：30459309